

スポーツジムに通い始めて三ヶ月が経った頃。

週に三回、仕事終わりに立ち寄るのが習慣になっていた。近所にできたばかりの新しいジムで、設備も綺麗だしロッカーも広い。スタッフさんも感じがよくて、最初はビビっていた筋トレマシンの使い方も、今では大体わかるようになった。

唯一の難点は、施設が広すぎてまだ館内の配置を把握しきれていないことだった。

更衣室とシャワールームの位置関係が、通い始めてからずっとあやふやなままで、毎回なんとなく感覚で歩いていた。

「よし、今日もトレーニングして帰ろう」

その日も残業を終えてからジムに向かい、一時間ほどマシンを使ってたっぷり汗をかいた。

いつも使っているトレッドミルと、それから最近挑戦し始めた背中のマシン。じっくり体を動かしていたら気づけばいつもより遅い時間になっていて、館内に残っている客も少なかった。

(早くシャワーを浴びて帰ろう……)

ロッカーからタオルとシャンプーを持ち出してシャワールームへと向かった。仕事の疲れが足に来ていて、早く帰って横になりたいという気持ちが頭の大半を占めていた。

廊下を歩きながらスマホを見ていたのがいけなかった。

さっきまとめて届いたLINEの返信をしながら歩いていたら、いつもと違う方向に曲がったことに全く気づかなかったのだ。

シャワールームの扉を開ける。

湯気が充満していた。

ザアザア、ザアザア。

シャワーの音が、湯気の向こうから聞こえてきた。

(あ、まだ人が残ってたんだ……)

それにしても、なんだかシャワールームってこんなに広かったっけ。そう思いながら中に進むと――

「……っ」

息が止まった。

シャワールームのひとつが使用中だった。すりガラスの向こうに、大きな影が見えた。

男の人の、影。

外から見てもわかるほど、肩幅が広い。鍛えた体のシルエット。鍛えた体のシルエット。

（ここ、男子シャワールーム！？）

ようやく気づいた。

廊下の突き当たりで右に曲がるはずが、左に曲がっていたらしい。女子シャワールームと男子シャワールームは廊下を挟んで対称に配置されていて、扉のサインをちゃんと確認しなかった自分が全面的に悪い。

頭が真っ白になった。全身の血が一気に顔へ上っ

た。耳の付け根まで熱くなる。

男子シャワールームに、間違えて入ってしまった。
よりによって、まだ人が使っている最中に。

すりガラスの向こうで大きな影がわずかに動いた。
それだけで心臓がどくん、と跳ねた。

(気づかれてない……よね？ まだ……？)

都合のいいことを願いながら、でも足は一ミリも動かなかった。

声を出すことも、引き返すことも、どちらもできなくて、ただその場に立ち尽くした。今さらよく見ると、扉の横に小さく「MEN」のプレートが貼ってある。

急いで引き返そうと踵を返した瞬間、シャワーが止まった。

ピタリ、と水音が消えた。

「誰かいる？」

低くて落ち着いた声だった。

心臓が跳ね上がる。

「す、すみません！間違えました！今すぐ出ます！」

声が震えていた。半泣きになりながら叫んで、後ろを向いた。

「待って」

その一言で、足が止まった。命令口調でも怒鳴り声でもなかったのに、なぜか体が言うことを聞いてしまった。昔から私は、強く言われるより、こうして静かに言われる方が逆らえない。

ブースの扉が開く音がした。

振り返ることができなかった。足先が震えている。背中がじりじりと熱くなる。足音がして、それがゆっくりと、でも確実に近づいてくる。

「……女か」

声が、すぐ後ろにあった。

恐る恐る振り向く。

——見上げるほど、大きかった。

(か、かっこいい人……)

百八十センチはゆうに超えているだろう。肩から腕にかけての筋肉がモデルのように張っている。

腰にタオルを巻いているだけで、上半身は何も羽織っていない。水滴が胸板を伝って落ちていくのが目に入った。

整った顔立ちで、切れ長の目に、高い鼻梁。唇はやや薄くて、今は無表情に近い。

濡れた前髪が額にかかっている、それがひどく様になっていた。端正な顔つきとは対照的に、体の大きさがなんとも言えない迫力を出している。

「あ……えっと、ほんとうに間違えてしまっただけ

で……すみません……すぐ出ますので……」

声がかすれた。うまく言葉が続かない。

「出て行かなくていいよ」

「……え？」

（出て行かなくていい、って……どういうこと？）

耳を疑った。

「もう誰も来ない時間だ。俺が最後の客だし」

「えっと……」

「シャワー、浴びるんだろ」

「え……は、い」

「隣のブース使いなよ」

「で、でも……」

「今日入ってきたこと、内緒にしてやるからさ」

「あ、あの、本当に間違えたんです……！」

「どうかな。わざと入ってきたってこともあるしさ」

「そんな、違います！」

「じゃ、本当に間違えただけならここでシャワーで
きるよな？」

「っ！」

それだけ言って、彼はくるりと背を向け、シャワ
ーブースに戻って行った。

それきり彼はシャワーを再開した。ザアザア、と
いう水音が響く。

しばらく迷った末、私は着ていたウェアを脱いだ。
しばらく迷った末、私は着ていたウェアを脱いだ。
慌ててブースの中に入り、脱いだものをまとめて端
に置く。

（なんか、ここでシャワー浴びないと後が面倒かも
……。それに、ブースは仕切りがあるし。体だって、
見えないし……）

熱いお湯を頭から浴びながら、心臓がずっとうる
さかった。

隣のブースに、見知らぬ男の人がいる。体の大き